

入選

ちょっとした思いやり

福岡県 今元中学校 二年

原田 陽茉莉

これは、私が中学校1年生の夏休みのできごとです。その日私は、友達といっしょに小倉にある祭りに行こうと、電車に乗って向かっていました。電車の中はたくさんの人であふれていて、窓の外も見えないくらいでした。そこに、ベビーカーに乗った男の子が、お母さんといっしょに乗っていて、私は「かわいいな」と思いながら見ていました。

そうして時間が過ぎていき、突然そこにいた小さな男の子が泣き出しました。私はすぐ泣き止むだろうからと、そのままでしたが、同じ電車に乗っていた40才くらいの男性から、私がお母さんだと勘違いされて、

「お姉ちゃんだったら、その男の子をどうにかしろ。」と、強く怒鳴られました。

私は何も言い返せずに、周りの人からもチラチラと見られました。その男の子のお母さんも、不安そうな顔をしながら謝るように私のことを見つめて、他人のふりをしていました。私はそのとき、どういう対応をすればいいのか、よくわかりませんでした。

そんなとき、電車に乗っていた二人の中学3年生らしき女子たちが、

「いない、いない、ばー。」

と声をかけたり、手で自分の顔をつまんだりして、男の子のそばに近寄ってきました。最初はずっと泣いていた男の子も、だんだんと笑顔になっていきました。そしてその子のお母さんは、さっきまで不安そうな目をして見えていたのが笑顔になり、私と中学生の女子たちに「ありがとう。」と言いました。

中学生たちは男の子に、

「たくさん泣いて、元気になるんだよ。」

と言って、笑顔で電車を降りていきました。電車に乗っていたみんなが、不安そうな顔から明るい顔に変わったと思います。その後私も電車を降りて、友達と楽しんでいたらさっきのベビーカーの男の子とすれ違いました。

そのときの男の子の笑顔は、今でも忘れられないくらいキラキラしていました。あの中学生の行動、「小さな親切」があんな小さな男の子の笑顔を守ったのだと感じ、私も勇気を出してみよう、と思うことができました。

中学生がお母さんと男の子を助けるために行った親切が、私にも勇気を与えてくれる「親切」となりました。このできごとをふまえて、私も誰かの笑顔を守れるような、また誰かに勇気を与えることのできるような人になりたい、と思いました。